

# TOYOTA 2000GT Replica by Hybrid



Scoop!

Bullet 創刊特別企画

## 永遠の夢が現実へ 世界に向けた イノベーション

Jクラシック・マニアの永遠の憧れTOYOTA2000GT。その崇高なまでの存在感と超レアな現状から、所有欲をそそるといふレベルを遥かに超えた、あまりにも特別なビンテージであることは周知の事実である。そして、そんな特別な領域を知れば知るほど、驚きに値するポテンシャルを秘めたレプリカが誕生しつつある、と聞いてもにわかには信じがたいに違いない。しかしながらご覧の写真はそれを証明する1台。国内はもとより、アメリカにおいてもそのカリスマ振りを発揮するプロショップ、ロッキーオートが満身創痍でフィニッシュに向けてセットアップする作品である。

photo/T.Fuchimoto 洲本智信  
取材協力/ロッキーオートphone0564-58-7080







## 「私の理想は社会に溶け込むクラシック」



これまでに、車種を問わずここまで完成度の高いレプリカは世界中を見てもそう多くはない。販売に向けて、想像を絶するプレミアムがつくことは容易に想像できる。

毎年名古屋で開催されているカーショー、オートレジェンドにおいて今年、1台のセンセーショナルな作品が入り口センターに鎮座した。TOYOTA2000GTである。この言わずと知れた日本の名車を前に、入場した多くのギャラリーは、何の疑いもなくカメラのレンズを向けた。その多くの目は「こんなに程度の良いトヨニはめったにお目にかかれない、とりあえず撮っておかなければ！」というマニア心を映していた。やがてそんな大勢のギャラリーの中の数人がふと表情を変える。「あれ、なんだかこれ、違うのかな……」という不思議そうな目に

変わったのだ。

そんなギャラリーの興味の焦点に対する様々な思惑は、作品の横に立て掛けられた1枚のサインボードに目をやることで一瞬にして統一された。そのキーワードはズバリ“驚き”である。

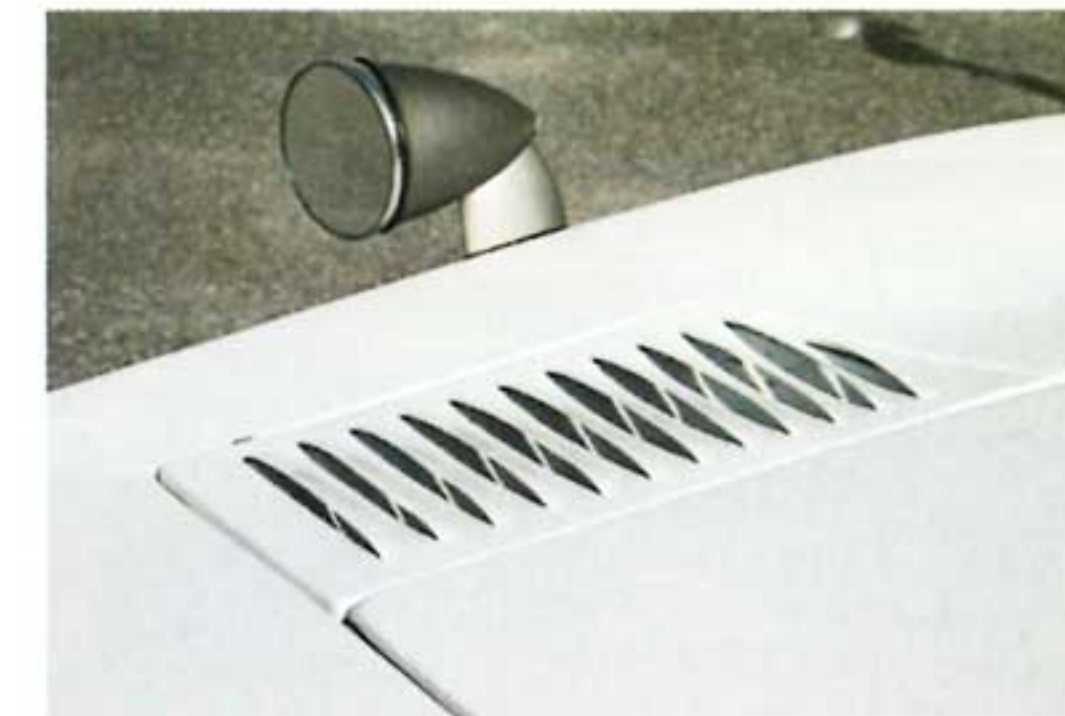
ご覧のTOYOTA2000GT、実はまったくのゼロから誕生したレプリカなのである。と、そう聞いただけでも驚きに値するが、さらに、そこに追い討ちをかけるようなデータがそれを増幅させた。なんとそこにはTOYOTA2000GTに並んでHybridの文字が燦然と輝いていたのだ。

Hybridというこの一文字が、この作品がタダモノではないことを象徴しているの言うまでもない。驚愕のコンセプトを手がけるコンストラクター、ロッキーオートの代表渡辺喜也氏はこう語る。「クラシック趣味を現代の感覚で愉しむ、という私にとってのライフワークとも言えるテーマを、最高のかたちで表現してみたかったです。いわばカスタムクラシックの理想型ですね」

最先端をいくHybridユニットと名車の融合。夢のような新車が公道を走り出すのは時間の問題だ。



フロントフェンダー左右に設けられたバッテリーメンテを兼ねたサービスハッチも忠実に再現している。



細かなディテリングが一台のクルマの価値を上げるといことを熟知した仕上げを随所に見ることができる。



マクロ感覚で追及する細部と、クルマ全体が放つ雰囲気とを交互に見ながら仕上げたという。納得である。



TOYOTA2000GTの最も美しいとされるリアハッチ周りも忠実に再現。ガラスのおさまり具合も完璧だ。



トヨニの特徴的な造形は言うまでもなく完璧に造りこまれている。ボディは基本的にフルFRP製となっている。



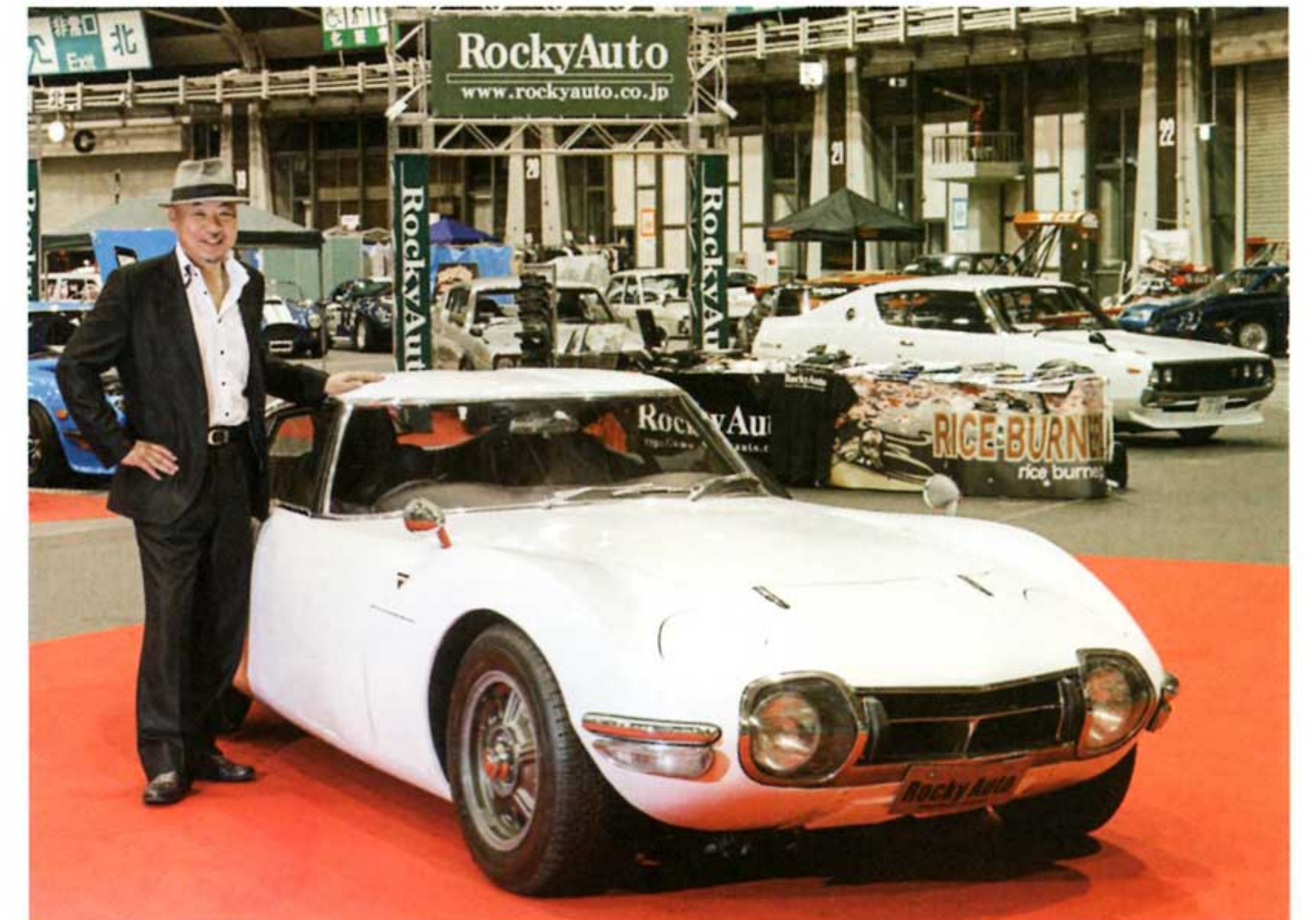
今では入手困難なパーツは、独自のノウハウで新規製作するという。それは完璧なまでのレプリカである。



展示車両に履かされたホイールは本物のマグ。量産型(といっても少数限定)はアルミでリメイクされる。



展示車のドアノブはホンモノだ。ここから型を起こしてレプリカを製作していくという。入手不可能なパーツへのこだわりは半端ではない。



大胆な発想と驚きの行動力で夢を具現化していくロッキーオート代表、渡辺喜也氏。今後の動きにも注目だ！



## SHOP WATCHING

# Bullet特選スペシャルショップ

# Rocky Auto

ロッキーオート  
 営業時間 9:00~20:00  
 〒444-0003 愛知県岡崎市小美町字殿街道153  
 Phone 0564-66-5488 E-mail rockyauto@rockyauto.co.jp

わが国でいち早くエンジンコンバートを手がけたことで広く知られるロッキーオート。単なる旧車カスタムの枠を超えて、新しいクルマをプロデュースするかのごとく誕生するクルマは旧車マニアはもちろん、高級車オーナーのセカンドカーとしても人気が高い。多くの遊びの達人たちに愛されるスペシャルショップを覗いてみよう。

text/K.Yamazaki 山崎和彦 photo/T.Fuchimoto 洲本智信



## ファクトリーかミュージアムか！ 憧れの名車が並ぶ巨大スタジオ

わが国の旧車文化において、大きな一石を投じたショップがある。ロッキーオート。愛知県は岡崎市に本拠を置く巨大旧車総合ディーラーである。

1960年代から1970年代にかけて、戦後日本のモータリゼーションが急成長を遂げながら、各メーカーは競うように個性的なクルマをリリースした。ロッキーオートの代表、渡辺喜也氏はその当時だからこそ実現できた美しく、ユニークなクルマに注目。

一人でも多くのカーマニアに、その特上のテイストを末永く愉しんでもらおうというコンセプトを掲げ、独自のノウハウで様々な内容のクルマをプロデュースすることを決意。1987年の創業から現在まで、多くのファンを誕生させながら邁進を続けている。

ロッキーオートの成功におけるキーワードはカスタマイジング。旧車の美しさや素晴らしさをしっかりと理解した上で、大胆にメスを入れるという前代未聞のノウハウ



街道筋に忽然と現れるシックな社屋。ショップと言うより、巨大スタジオと呼ぶに相応しい外観である。

が、多くのマニアの目を引いた。「もちろん最初はいろんな意見がありましたね、でも実際に仕上がったクルマを見て、乗っていただくことで、ユーザーの方々の考え方も少しずつ変わっていったのだと思



広い商談室には、ロッキーオートがこれまでに各方面で獲得してきた沢山のトロフィーが並ぶ。



体育館がいくつも入ろうかというショールームには、超レアなビンテージカーも陳列されている。



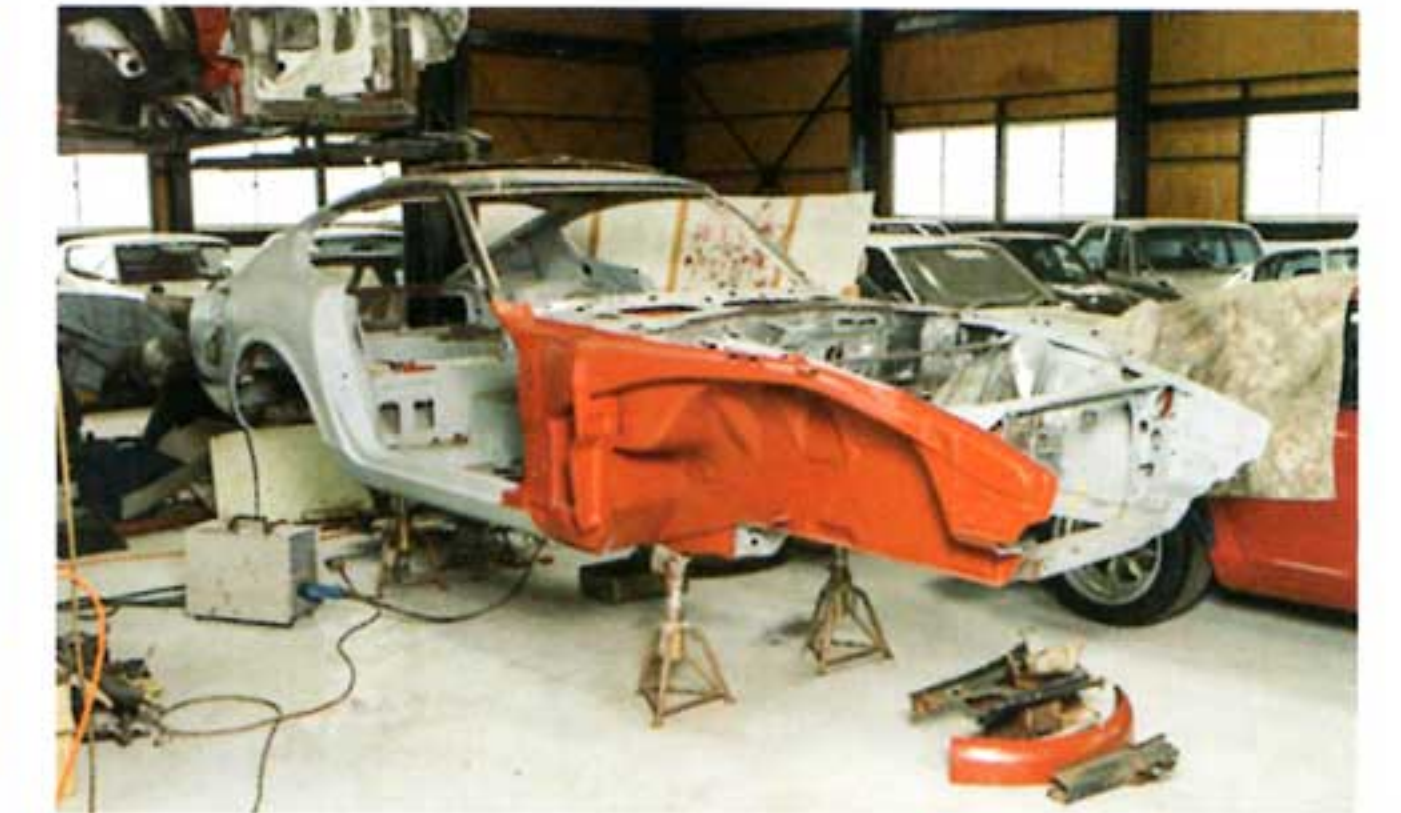
いつも明るい笑顔で迎えてくれるスタッフの面々。可能なかぎりユーザーの意見をクルマに反映させることをモットーとしている。



クラシックカスタムファンに大人気のオリジナルアイテム。ブランドとしてすっかり定着した。



完全予約制なので、落ち着いた雰囲気の中、社長の渡辺喜也氏から説明を聞くことができる。



リフトが立つファクトリーセクションでは、車体のフルレストア、モディファイ、補強からエンジンコンバートまで、複雑で細かい作業が淡々と続けられる。



このショールームに入ると、まるで1970年代にタイムスリップしたような感覚になる。魅力的な空間だ。



きちんと車種別に陳列された育ちのいい旧車たちが、これからの伴侶を待っている。



オリジナルブレーキキット  
 価格28万9000円(税抜)

## より安全により確実に オリジナルブレーキキット

数あるロッキーオートオリジナルパーツの中で、多くのファンから絶大な支持を得ているオリジナルブレーキキット。ベンチレーティッドディスクローターと1ピース4ポッドキャリパーによって構成され、S30Zとハコスカ用が用意されている。最大の特徴はキャリパーサポートを必要としないことで、シンプルかつ直接的なブレーキフィーリングを得ることに成功している。装着に関して、ハコスカは15インチ以上、30Zは16インチ以上のホイールに対応する。

っています」と語る渡辺喜也氏。その言葉の裏には「クルマは元気に走ってこそ意味がある！」という氏の揺るぐことのない基本コンセプトがひしひしと感じとれる。

というわけで、一度は訪れてみたいロッキーオート。しかしそこには完全予約制商談システムと呼ばれる、ひとつのルールがある。これは、決して安くはないクラシックカスタムを販売するにおいて、じっくりとお客様が納得のいくまで商談をしたい、という渡辺喜也氏の考えから導入されたシステムである。常時100台以上の在庫は一見の価値あり！じっくりと話を聞きたい方は、ぜひ予約されることをお勧めする。



AUTO LEGEND 2014 Special Report

# 中京地区最大クルマの祭典 オートレジェンド2014

9月20日、21日のポートメッセ名古屋は、個性的な出展者と熱心なお客さんで溢れかえった。往年のレーシングドライバーやミュージシャンなど多彩なゲストも目白押し。会場の興奮そのままに、オートレジェンドのキーマン達に話を伺った。

text/t.hayashi 林 竜也 photo/t.fuchimoto 淵本智信 問い合わせ/info@autolegend.jp



Part. 7

旧車ブームの必殺仕掛け人  
ロッキーオート社長渡辺喜也に聞く

## 自動車メーカーが やれないことをやる その面白さですね!



ロッキーオート代表取締役渡辺喜也氏 昭和39年1月生まれの50才。「よく恐い人だと思われて困るんですよ」というが、いたって気さくでフレンドリーな人物。この人柄で多くの旧車ファンの信頼を得ている。



スタッフとロッキーHVスペシャルの前で。どうみてもオリジナルのトヨタ2000GTでしょ!?



ロッキーHVスペシャルを命名したのは、元トヨタワークスの細谷四方洋(しまみ)氏。細谷氏もその出来の良さに驚いていた。

日産というよりもプリンス自動車時代からワークスドライバーとして活躍したレジェンド砂子義一氏も会場を訪れた。



開催5回目にして中京地区最大のクルマイベントへと成長したオートレジェンド。知らない読者のために一言付け加えておくと、展示されるクルマは国産旧車とスポーツ系で占められ、出展者はそのほとんどがショップさんというイベントだ。だから見て楽しむもよし、そしてその場で価格の交渉もできるという、ファンには二度おいしいモーターショーなのである。

そしてオートレジェンド2014の実行委員長であり、イベント全体のコンセプトを掌握、キーマンとなるのが、岡崎にある旧車専門ショップ「ロッキーオート」の代表取締役渡辺喜也氏だ。旧車ファンの間ではそれこそ「レジェンド」な存在だが、今回も大成功に終わったオートレジェンドについて話を伺った。「当時、すでに東京では旧車のイベントがありました。でもこの名古屋ではなかったんですよ。実際東京でイベントに参加してみたら、旧車ファンの方が多いこと多いこと。だったら是非名古屋、中京地区でもやりたいという思いがこみ上げてきて、気づいたらもうとっかかってました(笑)」

記者は今回が初参戦。ピッカピカに磨き

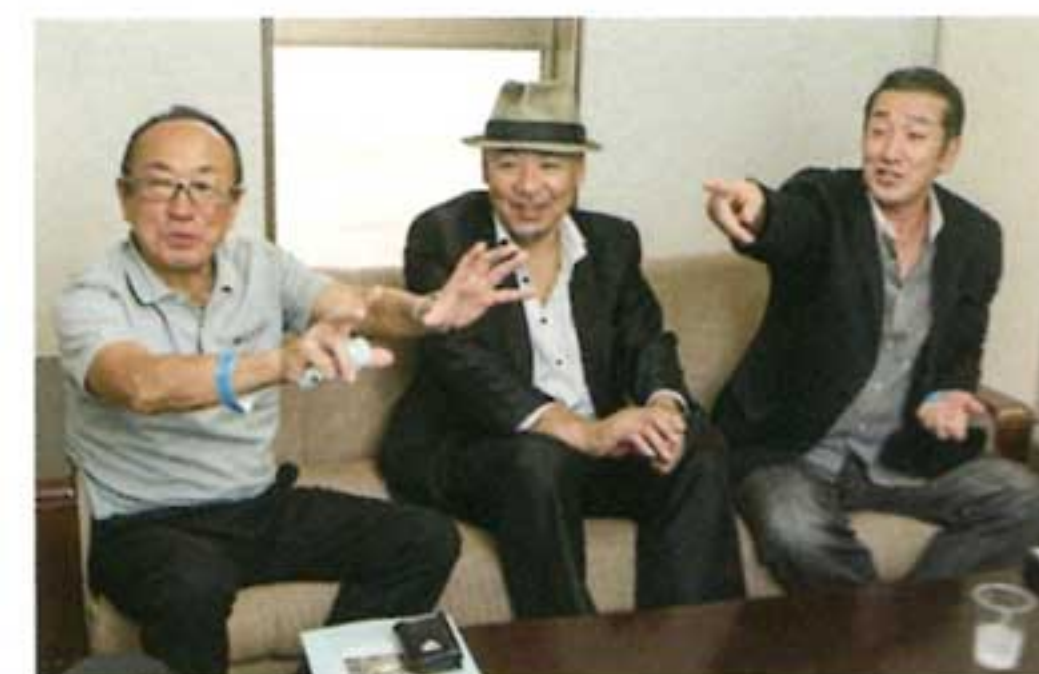
上げられた旧車やスーパーカーが数多く展示され、またそれを熱心に眺める来場者の皆さんの熱気に圧倒された。そしてさらに驚いたのは、ゲストの多いこと多いこと。トヨタワークスの名ドライバー細谷 四方洋氏、日産からは雨の柳田、柳田春人氏や同じくZ使いの桑島正美氏達がトークショーで会場を盛り上げる。さらには20日はロックバンドクールズ、21日には横浜銀蠅が熱いライブを繰り広げ、皆総立ちでノリノリ状態。クルマだけを展示するイベントが多い中で、そのエンターテインメント魂は天晴れだと感じた次第。「もうクルマ関係のイベントに行きだして25年くらいになります。なかには最終日だらけてしまうイベントもあるんですよ。でも自分でやるなら、それはしたくない。最後の最後に盛り上がりた、そう思うでしょ誰でも(笑)。それに僕は出展者の皆さんもお客様だと考えているから、そういった人たちと一緒に盛り上がり、「あのイベント良かったよね!」。そう感じて帰ってもらいたいんですよ」

こうした渡辺氏流のオモテナシが、オートレジェンドを形作っているといつてもい

いだろう。来場者も出展者もそして主催者も、同じクルマ好きとして楽しい時間を共有する。だからこそこれだけ多くの支持を受けているに違いない。

最後に渡辺氏にイベントの今後について伺った。

「来年はもう決まっています。9月20日曜日の1DAY。スペシャルゲストに細谷さんと細谷さんに乗った垂涎のレーシングマシンも登場する予定です。皆さん、びっくりされると思いますよ。それ以外の目玉も考えてますし……。僕ら旧車をやってますが、メーカーさんは過去のクルマを作り直すわけにいかないじゃないですか。でも僕らならできる。そこが面白いんですよ」



ロッキーオートには桑島氏の優勝トロフィーやカップなどが置いてあるスペシャルルームがあるのだ。





1968年の第二回富士1000kmレースのトヨタ7 (415S)。2000GTのエンジンやサスペンションが流用され開発されたマシン。

細谷四方洋 (ほそや しほみ)

1938年(昭和13年)生まれ。1963年の第一回日本グランプリにトヨタパブリカで出場し3位となる。翌年には契約ドライバーながら常勤嘱託課長待遇で技術部に所属。その後「チームトヨタ」のキャプテンも務め、トヨタモータースポーツの第一人者。

Part. 2

誕生以来約半世紀トヨタ2000GT開発秘話  
「生ける伝説・細谷四方洋のクルマ愛」



速度記録挑戦中の2000GT。巻き上げる水煙が見事にウエストライン下に流れている。バンクは水が溜まらないため、直線の方が恐かったらしい。



速度記録挑戦直後の東京モーターショー。訪れた皇太子(現今上天皇)は非常に興味を持たれたという。

トヨタ2000GTは色々な意味でそれまでの国産車とは異質であった。発表されたのは1967年だが、前年の66年にはプロトタイプによる世界速度記録挑戦が行われ、またその車両がモーターショーに展示されるなど、すでに発表されたも同然。またトヨタの車両ながら開発・生産にヤマハが深く関わったと言われている。コラボレーションが流行の現代であれば珍しくもないが、およそ50年前のことだ。型破りなことだけに違いない。

そんなトヨタ2000GTを語る上で、是非話を伺わなければならない人物がいる。元トヨタワークスドライバーの細谷四方洋(しほみ)氏である。今回ロッキーオートが

オートレジェンド2014で「ロッキーHVスペシャル」を発表したが、来場された細谷氏にトヨタ2000GT開発のあれやこれやを伺った。

「トヨタ2000GTの第一号車が誕生して、来年がちょうど50年なんです。チームでこのクルマを作っていたときは、まさか50年後にこのクルマについて話すことがあるなんて思ってもみませんでした。それにしてもネットを中心に嘘やデマが飛び交っている、2000GTに関して。だから僕が本当のことを声を大きくして言わなければいけません」と

細谷氏の鼻息は荒い。そしてご高齢にもかかわらず、熱くクルマのことを語り出し

た。「1965年5月に予定されていた第三回日本GPが中止されました。それでスポーツカーを作らなければならないということで、人を集め出したんですよ。リーダーに河野(二郎)課長、河野さん直属の部下でエンジン担当の高木(英匡)さんはすぐ決まって、その後デザイン担当の野崎(諭)さん、シャシー・サスペンション担当の山崎(進一)さんがいらっしやう。松田(栄三)さんが現場との調整役、雑務を水上女史、そして私の7人のチームでした」

細谷さんによれば、ヤマハとタッグを組む時点で、基本的な設計図はすべてチームの手により出来上がっていたという。

「もちろんヤマハさんには非常に感謝しています。わずか1年足らずの間に1号車を作り上げてくれたんです。だから私はヤマハさん無くしてこのクルマはできなかったと思っています。ただ元になるものは、7人で作ったんです。これは大きな声で言いたい(笑)」

こうして1965年8月、第一号車が完成した。そして延期されていた第三回日本GPに1966年満を持して出場するも、日産はR380で出場。トヨタ2000GTは細谷氏のドライブで3位に入るのがやっとだった。

「スポーツカーとはいえ乗用車とレーシングカーですから、勝負になりませんよ。そうしたら高木さんが世界速度記録に挑戦しようと言いつつ。なんとか2000GTの名前を残そうと、皆必死だったんですね」

1966年10月1日、偉大な挑戦は当時茨城県谷田部町にあった自動車高速試験場で行われた。

「それまでテストは三回行いましたが、すべてトラブルが出て完走できませんでした。そして本番では台風で難儀しましたよ。でもこれは私の自慢なんです、雨の中を疾走する2000GTの写真を見てください。水しぶきがウエストラインより上がっていないでしょ。風洞も何もない時代、これだけ空力の良い安全なクルマを作ったんです。デザイン担当の野崎さんの力ですよ。彼以上のデザイナーは今後出ないんじゃないかな」

チームトヨタのドライバーは5人。150リッタータンクを搭載しているため、ドライバーはワンクール2時間半の走行を強いられるという。そしてコースは直線とバンクのコーナーのみ。そして細谷氏は、眠気と戦うのが大変だったと笑う。「とにかくトヨタ2000GTは国産初の本格的なグランドツーリングカーを目指したん

です。すでにトヨタスポーツ800やホンダS500、そしてフェアレディがありましたけど、排気量が小さかった。ジャガーEタイプやロータスエリートを参考にしながら、欧米のGTカーに見劣りしないものを目指しました」

しかし大卒の初任給が2万数千円の時代に238万円という価格のせいか、1970年には総台数337台で生産中止。レースで

も思ったように活躍できないまま、トヨタ2000GTはその生涯を終えた。

「ところがどうです、50年後にこれだけ皆さんの関心を集めている。コンディションの良いクルマは、億の値段がつくと聞いています。あのとき7人で必死になって作った車が、50年経って皆さんに喜ばれている事実。本当に嬉しく思います。2000GTは僕らの魂のこもったかわいい奴なんです」



試作第1号車のフロントフェンダーは峰が立っている。これは細谷氏がドライバーの視点で発案したものだという。



# 旧車ファン必見! 欲しいクルマが必ず見つかる!? 会場で見つけた個性派SHOPカタログ

Part. 3



## ベンチシート、コラム式ATで決まり! プロフィット 静岡県浜松市東区笠井938 phone 053-435-4546

昭和50年代から昭和の終わりまでの絶版VIPカーにこだわった品揃えが自慢のプロフィット。代表取締役の森田さんが1980年代の古き良き時代のセダンを猛烈に愛していることから、ショップのコンセプトが決まったという。

「あのころ乗ったクルマもあるし、手ではなかったクルマもありますけど、エクステリアデザインやインテリアデザインそしてクオリティは今のクルマよりも上。魅力に溢れていますよ!」

そして商品ラインナップでのこだわりは、「最高級グレード」。そしてボディカラーは黒と決めているようだ。「オートマ、ベンチシートそしてコラム式シフト。この組み合わせが私の黄金比。そして事故歴無し、走行距離は10万km以下のクルマを厳選しています。だからトラブルも少なく乗れるんですよ」

80年代当時、セダンは白が流行っていたはず。黒いクルマを探すのは難しいのではと聞いてみると、「社用車が意外と残っているんですよ」という答えが返ってきた。またタイヤもなるべくならホワイトリボンものを装着したいのだが、どんどん市場から姿を消しているらしい。

「ちょっと前までBS製のものが手に入ったんですが、最近もう作っていないみたいで別のを探している状態です」

展示車の中での一押しは、昭和49年式クラウンスーパーサルーンだそうだ。所謂「クジラ」と呼ばれたクラウンだが、今見ると独特なフロントフェイスがチャーム。ツインキャブ、ベンチシート、コラム式シフト装備のプロフィットスタンダードをクリアした超希少車だ。



第二展示場もオープン! まずは絶対好調の森田代表取締役



昭和49年式「クジラ」クラウンスーパーサルーン。懐かしい!



会場中央にずらっと黒いセダンが並びプロフィットブース。ベンチシート、オートマ、コラム式シフトのクルマ中心の品揃えが自慢!



## 働くクルマからスポーツカーまで オートショップタキーズ

静岡県浜松市西区伊佐地町3000-5 phone 053-482-1617

「昭和の憧れに会える店」がキャッチフレーズのタキーズ。主に60年代から80年代の国産車、アメ車、そしてバイクまでも扱う専門店だ。オートレジェンドでの展示はスポーツカー中心だったが、ダットサントラックやトヨエースなど、スポーツカーだけでなく働くクルマも扱っているという。代表の瀧さんに話を伺う。「やっぱり旧車はオリジナルの状態がいいと思っていますが、GT-RやS30のフ

代表一押しの1970年式日産スカイラインGT-R (PGC10)。コンディションは抜群!



ェアレディZは最近かなり玉数が減っています。そしてオリジナルを維持しているものが少なくなりました。だからタキーズではオリジナルにこだわって手直しをしてお客様にご提供しています」

やはりGT-RやS30は人気だそうだ。しかしセリカやS130Zなど、ホットモデルだけでなく目を向けるべきクルマは

まだまだたくさんあると瀧代表はいう。そういった想いが、働くクルマやオートバイまで扱うタキーズの原動力になっているに違いない。そして旧車の買い取りはもちろん、なんとパーツも買い取ってくれるのもタキーズの特徴。ちなみに仕事熱心な瀧代表は、会場で旧車のステアリングを調達しておりました!



1972年式スズキGT750J。前ブレーキがディスクではない初年度モデル



1982年式日産レパードの2リッターモデル。当時このデザインは衝撃的でした。



## ゆっくり走ろう、 おお〜、ローレル♪専門店 トータルカーショップ YK AUTO

静岡県浜松市東区積志町1028-5  
phone 053-433-8755



代表取締役高良さん。それにしては浜松って旧車専門店が多いのね。



「ウチは70年代の日産、特にL型エンジンに特化してやっています。L型は人気があってオーナーさんも多い。見てよし、乗ってよし、さらに(室内の)臭いがいい。他人が振り返ってくれるクルマ、それが古き良き時代のクルマの魅力ですよ」

代表の高良さんは、息もつかずに話してくれた。YKオートはケンメリと同時代のローレルを中心に扱うショップ。この時代のクルマはコンピュータがないため、電気系、そして燃料系をきっちり見てやればOKだし、万が一トラブルでも修理も簡単だという。「あくまで普通に楽しんでほしいのがコンセプトだけど、2リッターだとちょっと物足りない。だからL28載せたり、さらにボアアップしたり、やり過ぎるとキャブ被っちゃうけど、ちゃんと走ってちゃんと止まるクルマに仕立てます」

この時

1972年式日産ローレルGL。これもL28の3リッターボアアップ版。ソレックス、ステンレス製タコ足、マフラーはワンオフのオールステンレス製。



1970年式日産ローレルSGL。L28を3リッターにボアアップ済み。



ウエザーストリップに張らずゴム製品は消耗品。手ごろな価格で手に入れたい。

## 旧車のパーツを手ごろな価格で! M'speed

京都府八幡市岩田茶屋ノ前21  
phone 075-982-9778

「旧車のパーツってやっぱり探すの大変。それに高いし!」といった声に応え、オリジナルパーツの製作販売を手がけるのがM'speed。代表の森川さんは元々貿易関係の仕事をしていて、取引先に自分の車につけるためのウエザーストリップを発注したのが始まりだという。「余ったらオークションで売れば良いくらいの気持ちで作って売れば売れます。純正品は高いんですけど、価格もかなり手頃でしたしね。それで外装品や内装品、メッキパーツなどを作り始めたというわけです」

現在箱スカ、ケンメリ、フェアレディZなどの日産系に加え、TE27、タルマセリカ、AE86系のトヨタ系のオリジナルパーツをラインナップ。一度M'speedのHPを覗いてみてはいかがでしょうか。



代表取締役の森川さん。品質と価格は厳しくチェックするという。



樹脂部品も経年変化が大きな部品。樹脂は経年劣化するメンテが難しい。



## 夢は実車でトミカパーキング!?

VRP (ブイ・アール・ピー)  
岐阜県揖斐郡池田町草深212-4 phone0585-45-0198



代表取締役の河村さん。若い頃は全欠で中古車専門だったという。

「販売するクルマは、すべて自分が欲しいクルマ。乗りたいクルマ。だから正直売りたいんですよ(笑)」といきなり商売っ気ゼロの河村代表。自分がオーナーとの視点から、クルマ選び、メインテナンス、場合によってはチューニングをしているという。しかも展示車はすべてナンバーを取得し、任意保険にも加入済み。つまり河村さんがいつでも乗れるようにしているのだ。

「自分にとってウチのショールームはトミカパーキング。子供がトミカパーキングで遊ぶように、僕は原寸大のクルマをショールームに並べて楽しんでいるわけです。そしてクルマに対する感覚もなるべく自分と同じだと思うお客さんにお譲りするようになっています」

お客様は代表と同年代の方がほとんど。なかには80才オーバーなんて方もみえるらしい。それにしても人気車なら入手もある意味やりやすいだろうが、普通の古いクルマっていったいどうやって探しているだろう。

「最近昭和40年代のクルマを仕入れるのが難しくなってますね。でも20年この商売やってますんで、全国の整備工場やモーター店とのお付き合いがあって、そこにいらっしゃるお客さんの車を購入させて頂くことが多いと思います」



1973年式マツダサバンナRX-3GT。RX-3のグッドコンディションなクルマは希少。



4ドアビラードハードトップが採用された1974年に登場した5代目トヨタクラウン。

旧車のパーツもネットオークションなどで、昔よりは遙かに探しやすくなったと喜ぶ河村さん。目で見てわかりにくい、電気系のメンテナンスには特に力を入れているそうだ。ところで自分の好きなクルマはやっぱり売りたいくないのでは? 「自分用の1988年式ボルシェ911ターボ。どうしてもって言われてこないだ売りました。今後悔しているんです。あれは失敗しました(笑)」



1988年式日産ジュニアトラックに乗るのは1964年スーパーカブC102(105か?)



純白に張り替えられたシートと内張り。F Dのエンジンに換装しチューニング。良い感じに仕上がってます。

## 憧れのRX-7をトータルサポート TOTAL SEVEN

愛知県春日井市大留町5-7-3 phone0568-53-0707

「トータルセブン」という名前が示すように、RX-7のことなら中古車、修理、メンテナンス、チューニングまで、お客様のニーズに合わせて対応可能な専門ショップ。店長の瀧原さんにオートレジェンドのイベントの司会でお忙しい中、お話しを伺った。

「FCは大人気で、40代、50代の方が多く見に来られます。生産中止してからやはり相当年月経ってますんで、中古車のコンディションはまちまちですね。もちろんお客様のご要望に合わせて、メインテナンスなり、レストアなりしてお渡しています」

今回オートレジェンドで展示されてい

たのは、FCの2台。カブリオレの方は、街乗り仕様。元々ベージュの革シート仕様だったものを張り替え純白仕様に。エンジンはFD用を搭載し、馬力はおおよそ280馬力。

一方クーペの方は、峠仕様。馬力はカブリオレほど出ていないが、足回りにHKSをチョイスし、軽量で楽しく走れるクルマを目指したという。

「FCに共通した弱点は錆。ウエザーストリップなどが痛んで、トランク内に水が溜まることある。知らずに放っておくと錆どころか穴が開いてしまったりもするんですよ。それとターボのホース回



り。これも接合部の樹脂部品の硬化により、ブーストがかかってホースが抜けたりします。そのあたりのポイントを抑えてやれば、それほどお金をかけなくてもRX-7は楽しめます」

FCそしてFDもコンディションの良いクルマは確実に減ってきているとのこと。ロータリーエンジンの復活が期待できない今、FC、FDのセブンでロータリーの醍醐味を味わうというのも良いかもしれない。



クーペのほうは馬力よりも走ったときの楽しさ重視のチューニング。

## Editor's Photographs at AUTO LEGEND 2014

オートレジェンド2014の会場にはまだまだ面白い物が目白押し。編集部目録で気になったあれやこれやをお届けしよう。



初日はクールス、そして2日目には横浜銀鯊が会場を大いに盛り上げてくれた。



ホイールメーカーは2社が出展。ワークさんはジャガーF TYPEでアピール!



ダットサン・スポーツカー・クラブ・オブ・ジャパン中部の皆さんが、およそ40台の貴重な2を堂々展示。圧巻です。



実際に映画の撮影に使われたデローリアンを展示したのはロッキーオートさん。トヨタ2000GTだけじゃないのだ!



実際に映画の撮影に使われたデローリアンを展示したのはロッキーオートさん。トヨタ2000GTだけじゃないのだ!



ホイールメーカーは2社が出展。ワークさんはジャガーF TYPEでアピール!



レイズさんは、旧車で勝負! こうやってみるとホイールのデザインって新しくても古くても合うものなのね。



創刊前にも関わらず編集部も出展。メイちゃんの魅力で押すな押すなの大盛況!?



TOYOTA 2000GT Hybrid 発進!

Classic & Custom Car Magazine

Goods Press 12月号増刊 Bullet

[バレット]

Vol.

01

定価 1000円

# Bullet

総力特集

## Rocky Magicの真実

750馬力“Z”に見る渡辺喜也の本気度  
RB vs. Lそれぞれのテイスト



[USAスペシャルレポート]

Excellence J-Classic in CA.

BREピートブロックのV8 DATSUN510